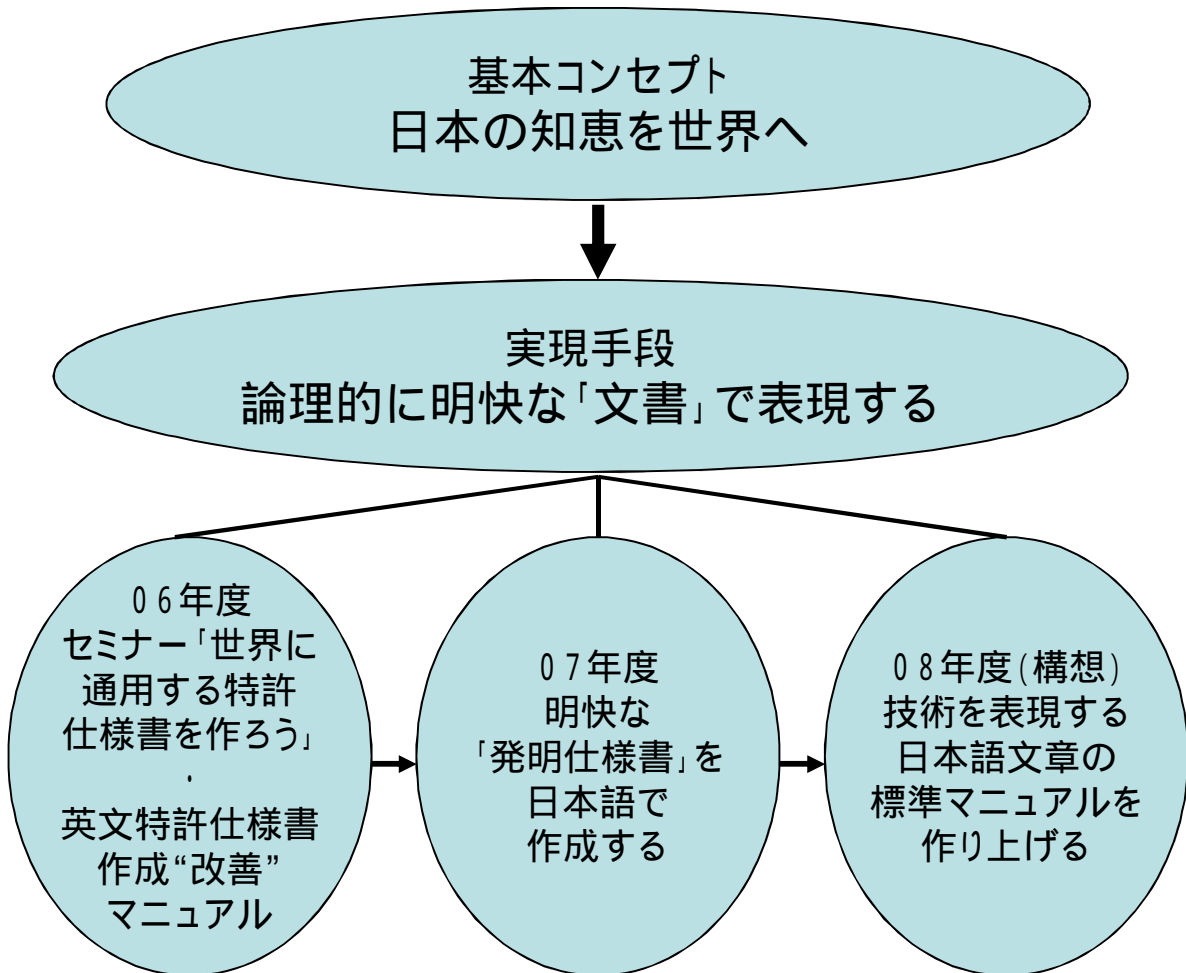


# SLE塾 2007年度の計画

2007年4月  
日本アイアール(株)  
知的財産活用研究所  
篠原泰正

# SLE塾の3年計画



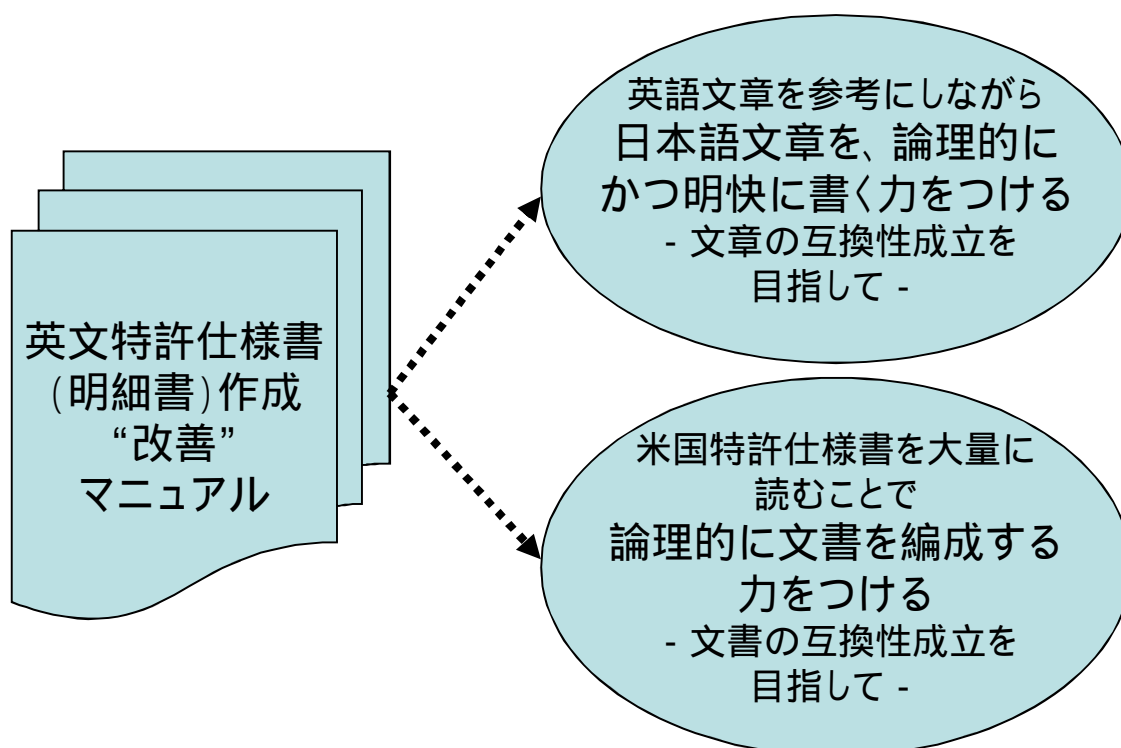
昨年、06年2月から、SLE (School of Logical Expression) 塾を、前半は毎週、後半は隔週で開催してきました。並行して、1月から隔月で計5回、「世界に通用する特許仕様書を作ろう」というタイトルで、無料セミナーを実施して来ました。

この二つの成果を盛り込んで、「英文特許仕様書(明細書)作成“改善”マニュアル」を作成し、今月4月1日に発刊しました。これによって、海外に出願する特許仕様書をどのように作成すべきかについて、その基本はまとめる事ができたと思います。

本年度(07年度)は、この「改善マニュアル」を受けて、さらに一步踏み込んで、知的財産の専門家の手に渡る前の「発明仕様書」を、どのように作成すべきかに取り組みたいと考えています。この仕様書の品質が、特許仕様書(明細書)として仕上げられる文書の品質を、左右することになると考えて、挑戦します。

来年度(08年度)は、技術を、日本語文章で論理的にかつ明快に表現するための、基本的な指南書作りに挑戦したいと考えています。たいへん高度な目標ですから、どこまで到達できるか、今のところまったく分かりませんが、日本の知恵を世界に伝えるためには、どうしても確立しておきたい仕事と考えています。

## 「英文特許仕様書作成“改善”マニュアル」 を土台にして



「英文特許仕様書(「明細書」作成“改善”マニュアル)は、日本から海外(主に米国向け)に出願されている特許仕様書の現状を分析し、その問題点となぜそのような状況になっているのかを明らかにしています。さらに、どのように改善すべきかの提案を示しています。

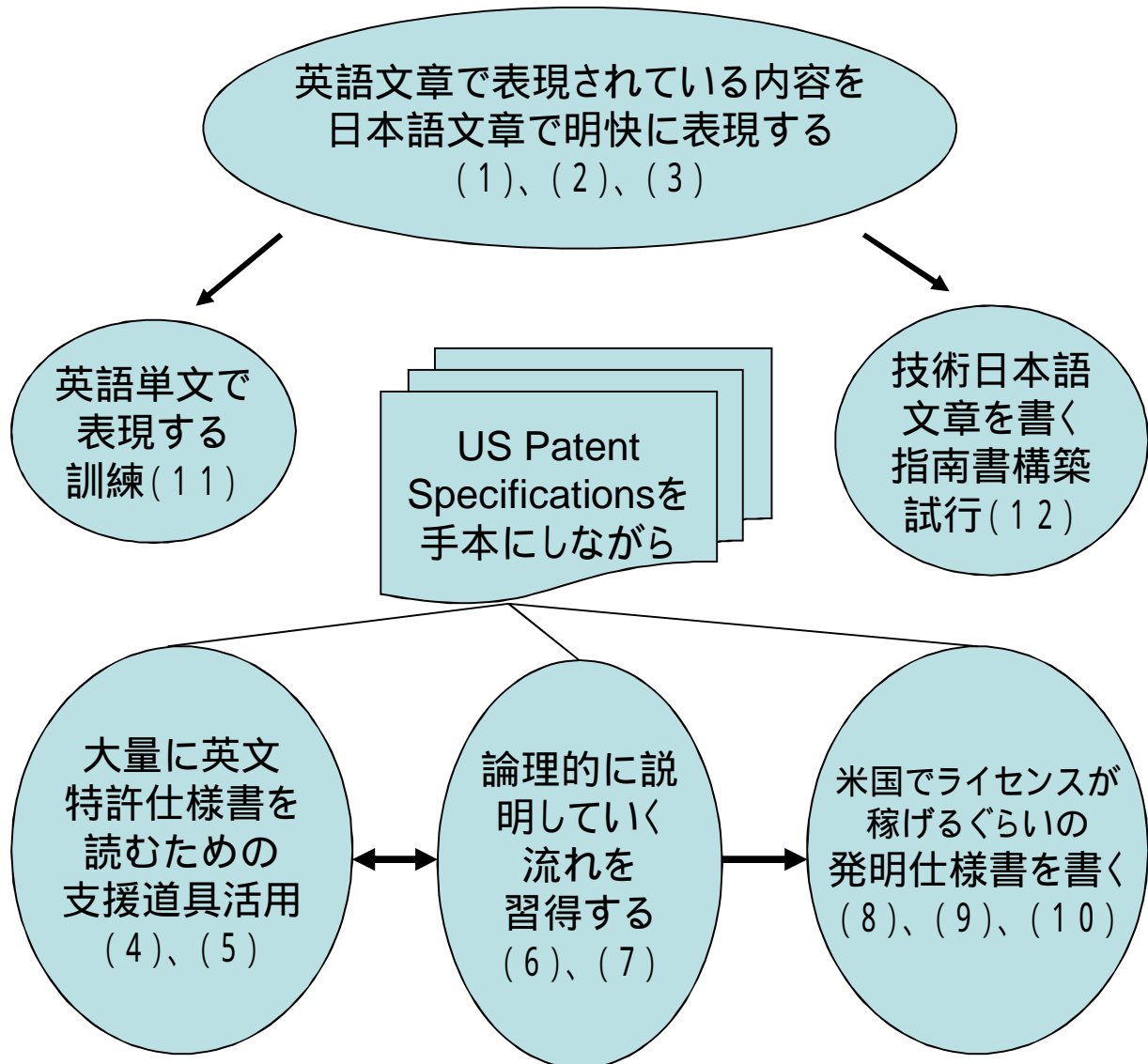
ここで示されている現状と対策を理解した上で、次には、論理的な文書編成と論理的な文章記述を、実際に身につけることに、段階を進めなければなりません。それが、本年度(07年度)のSLE塾の課題となります。

目指す文書は、技術者が作成すべき「発明の仕様書」となります。この仕様書作成には、発明者である技術者の表現力向上だけでなく、知的財産部門の専門家の支援と指導が必要となります。

この発明仕様書が明確に作成されていれば、それを英文に翻訳する作業は、翻訳専門家の手に安んじて託す事ができ、また、クレームを含んでの「特許仕様書(明細書)」に仕立てるのは、特許の専門家に任せればよいこととなります。

さらにいえば、発明の仕様書を明確に作成できれば、その他の仕様書や各種のレポート作成も、同じ表現能力の上で、展開できるはずで

# 07年度SLE塾構成計画



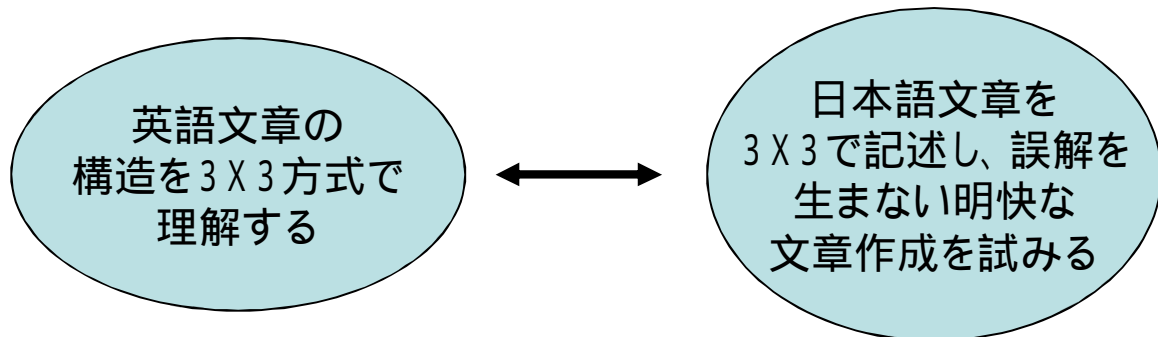
実行できるかどうか、はなはだ心もとないのですが、毎月ひとつ、上図の課題をこなしていく予定です。順序は入れ替わることもあると思われるので、あらかじめご了承ください。できれば、毎月ひとつテキストとして発行していくことを計画しています。

テキスト発行は、教室に参加できない方のための、「通信教室」という意味でも、何とか実現していきたいと考えています。従って、時々しか教室にこられない方も、当塾へ参加されることを期待しています。

\* 上図の番号は、1年間を12で割った番号であり、月を示すものではありません。

## 1. 3X3方式で日本語文章訓練

ねらい: 英語文章で表現されている内容と同じ内容を、正確にかつ明快な日本語文章で書けるようにする



(1)

サブジェクト(主題・主体)がどのような状態にあるのかを表現する。  
これは、例えば装置の説明であれば、構成要素の位置づけと、互いの関係を明確に記述する場合に適用されます。技術を説明していく上で、もっとも多く使われる文章形態であり、米国企業の特許仕様書では、記述されている文章のおよそ半分は、この形態に属していると数えることができます。

(2)

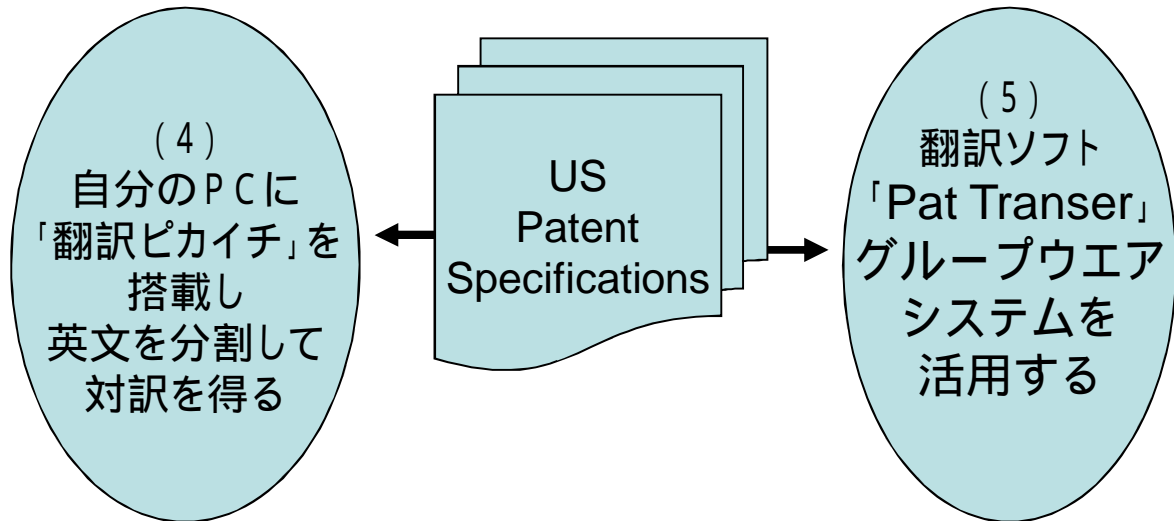
- 1) サブジェクトが持つ属性を定義づける表現。  
これは、例えば、各構成要素の特性を明確に規定する場合に適用されます。

- 2) サブジェクトがオブジェクトに対して何をしている(働きかけている)のかを表現する。  
これは、例えば、一つの構成要素が、他の構成要素に対して、どのような機能を果たしているのかを記述する場合に適用されます。英語は他者との関係を強く意識する文化の中の言語であり、一方、日本語はそれとは反対の位置にいる、つまりなるべく関係をあいまいにする文化の中の言語のため、日本語で文章を書く上では、常に意識して明確化を図らねばならない文章形態と言えるでしょう。

(3)

一つの文章の中での、詳細説明(追加説明)の接なぎ方。  
これは、文法的には修飾部の扱い方に相当します。日本語は英語が持つ便利な接着の道具(関係代名詞や前置詞など)や方法(動詞の分詞形など)を持たず、また細かい説明から述べていく順序のため、修飾部の扱いには細かい神経を使う必要があります。場合によれば文章を短くして正確さを期さねばならないこととなります。

## 2. 文章を分割して、その対訳を参考にしながら 英文特許仕様書をたくさん読むための支援



海外で特許を取得し、自社製品を防衛したり、あるいはライセンス収入をはかろうとするには、どのように発明仕様書、あるいは特許仕様書を作成すべきでしょうか。その基本は、お手本となりうる(なりえない駄目なものもたくさんありますが)英文特許仕様書を、ともかくたくさん読まねばなりません。たくさん読むことで、はじめて仕様書という文書をどのように編成していけばよいのか、感覚が身についてきます。

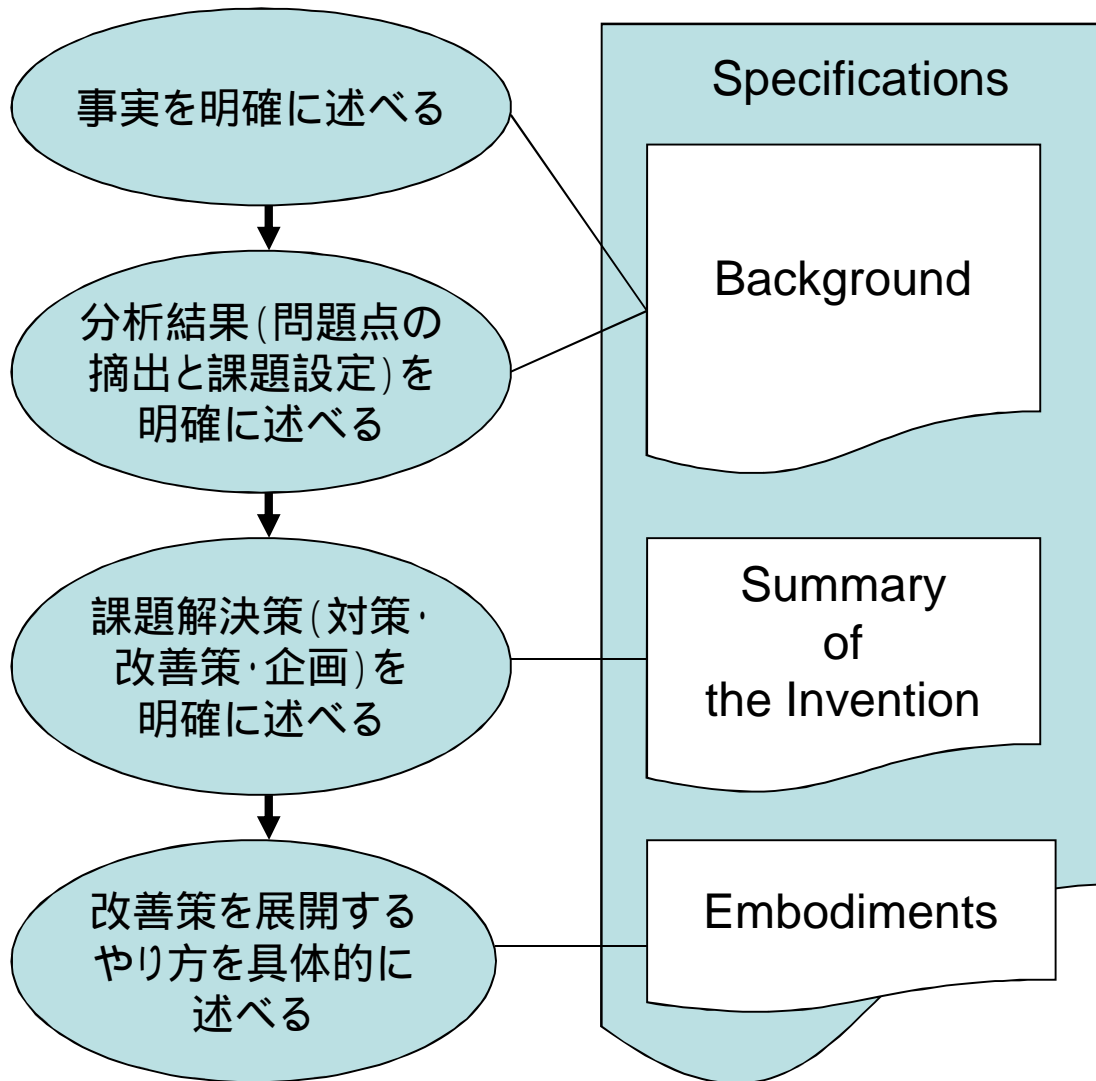
ろくに読みもしないで、形式がああだこうだといっているのは、畳の上の水練と同じで、何の役にも立ちません。

とはいえ、多くの人にとって、多忙な中で、原文のまま大量に読むのは不可能なことでしょうから、支援の道具・システムを活用する事が必須の要件となるでしょう。長い文章は分割して翻訳させれば、既存の翻訳ソフトでも十分に役に立ちます。せっかくの道具を活用しない手はないのです。

(4) 個人用には安い価格で翻訳ソフトが手に入ります。自分のPCにそのソフトを搭載し、長い文章を分割して対訳をさせることを、習慣づけたいものです。

(5) グループで仕事をしている場合は、ネットワークのサーバーに翻訳ソフトを搭載し、自分達の技術分野の特定用語を登録していけば、翻訳の精度はますます上がり、同時に、他の人が行ってくれた対訳成果も閲覧できますから、グループの仕事の効率は格段に上がるはずで、情報を共有する事がグループウェアの基本ですから、グループで共有しながら翻訳ソフトを活用する方法を、検討していきます。

### 3. 文書を論理的な流れの下に構成する

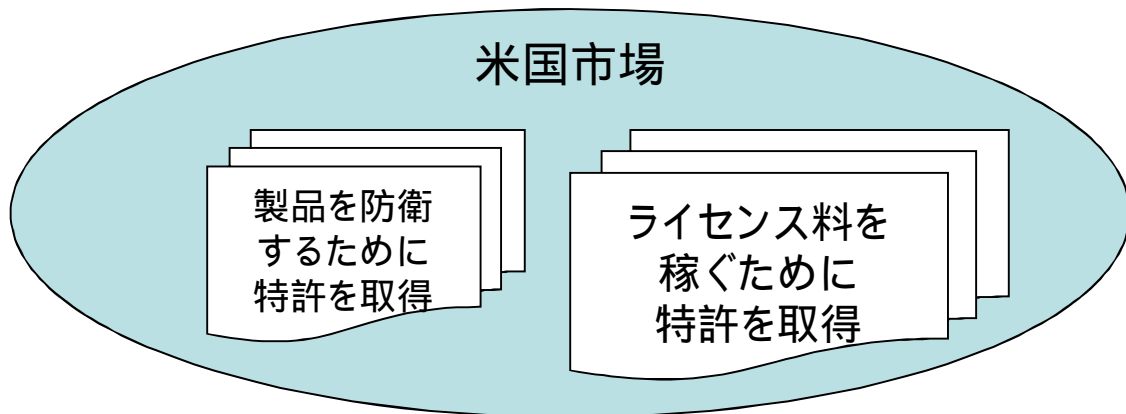


(6)  
論理的に文書を構成する(仕立て上げる)には、米国の企業・団体が作成した Patent Specifications が良いお手本になります。

前のページ示した読解支援道具を活用して、それらの手本をたくさん読むことで、他者に納得してもらうには、どのように文書全体を編成していけばよいのかが、具体的に身についていきます。

(7)  
さらに具体的展開の説明、すなわち発明の詳細説明をどのように展開して行けばよいのかも、お手本で習得していく事で身につけていくはずですよ。

## 4. 米国市場でライセンス料が取れるぐらいの特許仕様書を作成する



日本の企業が海外で特許の取得を図るのは、先ず何よりも、その土地で製品を販売する事業を守るためにあると思われます。

一方、米国では、自分では製品を作らず、他者からライセンス料やロイヤリティ収入を得ることを目的とした特許取得に、主たる流れは傾いているのではないかと思います。

(8)

この20年、米国の特許市場は、本来の理念を離れて、紙でお金を稼ぐための市場となっています。その実情を知らずに、日本と同じと思い込んで乗り込んで行くのは、裸で敵陣に切り込むようなものです。実情を、ハーバード大学とブランディス大学の教授2名が書いた「Innovation and Its Discontents」で概要を学ぶことにします。

(9)

「特許をとって億万長者になろう」というキャッチフレーズの下に、「The Patent Writer」と題したハウツー本があります。ライセンス料を稼ぐためにはどのように「強い特許仕様書」を作成すべきか、その秘訣教えます、という“有り難い”本ですから、われわれもその「秘訣」を学ぶことにします。

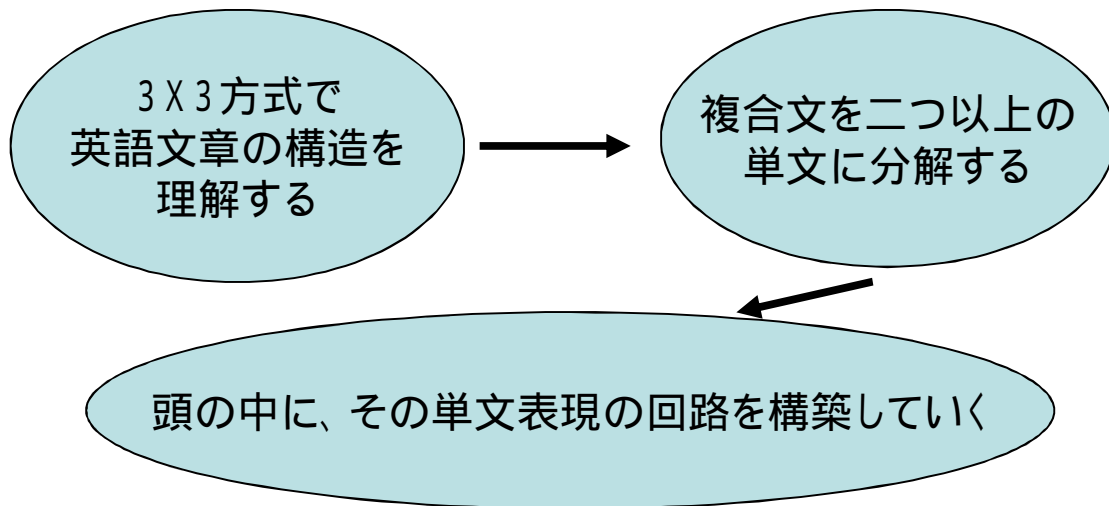
(10)

実習をしようと思います。塾生各人は、すでに特許を取得した自社の特許明細書(国内と海外両方で取得しているのがベター)を題材にして、他者からライセンス料を稼げるぐらいの仕様書に書きなおす(日本語で)作業を、できれば、やりましょう。

ライセンス料が稼げるぐらいの明確な仕様書が作成できれば、自社の製品を守るための強い仕様書も作る事ができると思います。



## 5. 英語で表現する基礎を作る



英語文章の構造が理解できれば、文章は楽に読めるようになります。(単語の理解力が不足していると無理ですが)。読めれば、自分で表現する事ができるようになっていきます。

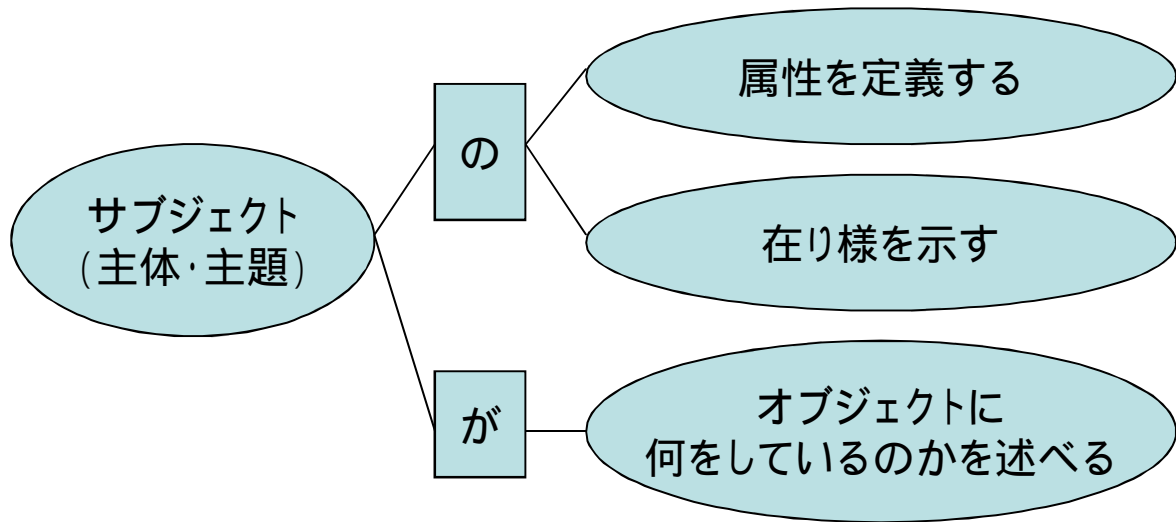
ほとんどの文章は、一つの主語と一つの動詞とその他で成り立っている単純な構成の「単文」が、幾つかつなぎ合わされて出来上がっています。文章の構造が分かれば、その文章を構成している幾つかの単文に分解する事ができるようになります。

(11)

会話において、言いたいことを表現する基礎は、この単文で表現できることにあります。せっかく構造を理解したのでですから、一步進んで、話せるようになります。会話能力の向上は、SLE塾の本来の目的ではないのですが、属する部門の種類に関わらず、実務の上で、英語での対面コミュニケーション能力の向上は重要な課題です。会話における英語での表現力向上のためには、集めた単文を繰り返し(声に出して)読む作業がもっとも効果があると思います。自分が担当する技術分野の物・事を記述した単文を集めて、その短い文章を頭の中に叩き込んでください。

英語で表現することはどういうことかを体験していけば、論理的に、物・事・考えを表現するということはどのようなことなのか、が身につけて行くはずですが、この事が、同時に、日本語文章で正確に、明快に記述する基礎訓練になります。誤解を招かないように明確に記述するためには、表現すべき事項が、書き上げた幾つかの単文のどれかに、確かに含まれているかどうかを確認していく方法も有効でしょう。

## 6. 技術を表現する日本語文章 その書き方の標準化を目指して



(12)

来年度(08年度)への橋渡しとして、技術を、日本語文章で、どれだけ正確に、明快に表現できるかという課題に、基礎的な挑戦を行いたいと思います。

目指すところは、英語その他主要外国語と、互換性を持った日本語文章の確立です。ここで言う互換性とは、二つの言語文章の間で、双方向に無理なく転換できることを意味しています。

この、互換性を持った日本語文章とはどのようなものか、が明らかになっていけば、たとえば、日本語文章から英語文章へ、英語文章から日本語文章への転換が、現状よりは格段に容易になり、また正確さも向上するはずです。

日本の知恵を世界に伝えるために、誰もが利用できる形で、日本語文章の書き方の基本法則あるいは手順をまとめていきたいと思っています。

とりあえず技術の分野に限っているのは、「発明」を対象としているからでもありませんが、より広く見れば、技術というものが、世界の普遍事項の中でもっとも文化の影響が少ないためでもあります。つまり、文章に互換性を持たせるのに、技術がもっとも適した分野だからです。